

1. グループ研究の方法について

私の担当した演習においてモデルにした岩田教授のゼミのグループ研究の方法について、最初にご紹介しておきます。岩田教授の方法には2つあります。1つは、前述の報告書の49ページにその様子を描写しておきました。

「20人程度の学生を7～9人のグループに分ける。教師の提示したテーマをグループごとに分かれて討論する。その間教師はほとんど介入せず、学生の自主性を重んじる。最後に全体で集って結果を報告し合い、全体討論する」つまり、小グループによる討論という形式です。

もう1つは3年の専門ゼミで行っている方法で岩田教授の解説によりますと、次のようです。「各自研究したテーマごとに小グループにわかれ、グループごとの自主研究をおこなわせている。まず5名以上の賛同者を得たテーマをゼミの正式研究のテーマとして承認する。月1回程度、簡単に進行状況をゼミナールで報告するが、あとはまったく自由に活動し、年一回公開発表会で研究発表をおこなえばよい。年一回の研究発表会は、おおむね満足のいくもので、よくぞがんばってくれたと思うような報告もすくなくない。このような研究活動のなかで、学生たちはじつにさまざまなことを学んでいく」⁹⁾これは小グループによる自主研究による方法です。この後者の自主研究の方法を、私の社会学演習でも採用させていただきました。

私もそれ以前に3回ほど、演習で大学教育や大学生に関する社会調査を行い、グループ研究の方法は取り入れていたのですが今回の小グループ研究は、社会調査のそれとも少し違うものです。その違いについてはあとで若干触れたいと思います。

私が過去2年間に担当した武蔵大学社会学科の演習8つのうち4つで小グループ研究の方法を採用しました。今日はその4つのうち3つの演習をその研究内容も含めてご報告させていただきます。

最初に、グループ研究のおおよその経緯を申し上げます。前期は、演習のテーマに関連する文献を読んで、全体で討論をするようなゼミをやり、後期からグループ研究の方法を採用します。

小グループのつくり方ですが、各自が関心を持っているテーマによって人を集める方法と、グループを作ってから研究テーマを相談させる方法があります。前者より後者の方がスムーズにいくようです。というのは、研究のテーマ自体を探すことが難しいからです。

そして、グループの作り方ですが、好きな人同士で集めるという方法が一見いいように思えます。しかしそれですといつもの友人グループで固まってしまうたり、どこのグループにも入れない人が出てきてしまう問題が生じます。くじ引きで機械的にグループをつくる方法が、学生たちに好評のようです。今回も3つの演習のうち2つはその方式を採用しています。

グループ研究の途中経過は岩田方式とはほぼ同じで、私は演習の最初に行き出席をとります。あとはグループに分かれてもらう。私は研究室に帰りコーヒーを飲んでいけばよい。とても教師にとって楽な方法です。ただグループごとに相談にくることを奨励します。この方法により、教師と学生との接触は、全体を一つでやるより増すように思います。月1回くらいの割合で、全体で途中経過の報告してもらいます。

そして、最後のところが、岩田方式と少し違うのですが、グループ研究の成果をみんなの前で発表するだけでなく、ワープロ打ちで最終原稿を出してもらい（その前に私が原稿に目を通し、朱を入れます）、それを冊子にして、ゼミ以外の人にも読んでもらいます。そのため学期の最後の1月の時点で演習は終らなくて、春休みをつぶして3月まで、ゼミの作業がずれ込むということがよくあります。ゼミの成果が冊子として残ることによって、学生のやる気も出てきますし、次の代に多大な影響を与えます。私の演習でこれまでに調査報告も含め6冊の報告書を出していますが、最初が一番大変だったようです。最初にある水準を越えた報告書が出来れば、次の年もそれに近いもの、あるいはそれ以上のものが出来上ります。

武蔵大学では、調査の報告書に対してその印刷費を一部援助してくれる制度があり大変助かりました。

グループ研究は、だいたい以上のような経緯をたどるのですが、この方式の是非は、学生の反応と研究の中身が勝負だと思いますので、以下3つの演習のグループ研究の様子と中身を、少し詳細にご紹介したいと思います。

2. 現代大学生の人間関係と価値観に関する実証的研究

まず、昭和61年度の社会学演習Ⅱ（2年次、青少年期の社会学）の内容からご報告します。前期は青少年期の社会学に関する文献を読んで全体で討議していたのですが、私の気紛れから後期に、岩田方式のグループ研究をやろうと思い立ちました。初めての試みだったので、学生も何のことかわからず、反対もできずにいたところ、強引に始めてしまいました。演習の経緯は、報告書の「はしがき」に書きましたので、そこをご覧下さい。

「まず最初のグループ分けが難行した。研究したいテーマを本演習のテーマ（『青少年期の社会学』）に即して各人に書かせ、そのテーマにそってグループ分けを試みた。しかし、提出されたテーマがバラバラでまず難行し、やっとなんとかまとまりかけた段階で、あの人といっしょにやりたくないという者があらわれ、全部御破算になった。あみだくじでグループ分けをしよう、その方が公平でいいということになり、結局それぞれ男2人女2人のグループが6つできた。

次の時間から私のする仕事は、演習の最初に教室にいった出席をとることだけとなった。あとは、みんながグループに散ったことを見とどけて、研究室に帰り、コーヒーを飲んでいればよかった。楽でいいなという気持ちとこんなことでうまくいくのだろうかという不安が混じりあった。

学生諸君の方は最初くじで決まった未知の仲間とどう話し合いをすすめたらいいいかわからず、うかぬ顔をしていた。各グループとも研究テーマす

もなかなか決まらない日々が続いた。次週そして次々週と、演習の最初に話し合ったテーマを聞いたが、まだ検討中というところが多かった。

しかしそのうち、演習の時間以外にも話し合いをすすめるグループがあらわれた。各グループとも他のグループの進行状況を大変気にしていたようで、1つのグループが突出すると、それにあおられたように他のグループの話し合いもすすんだ。

1つのグループがアンケートを作り、武蔵大生100名を対象に調査を実施した。それに刺激され次々と調査が実施され、文献研究もすすんだ。

しかし、このグループ研究を始めたのは後期になってからであり、気がつくとも演習の回数はわずかになっていた。そこで私は春休みの合宿を学生諸君に提案したが、それは冷たく拒否された。「忙しい春休みに合宿して、誰が参加すると思っているのですか」と。

仕方なく1月に入ってから2回の演習で各グループから最終報告を受けた。その模様を参観した松尾欣治氏（教育評論家）は次のように記している。

「今年の1月、以前から注目していた武蔵大学の武内教授のゼミを参観させていただいて、学生たちのざっくばらんな研究発表を聴いているうち、私は新たな大学生像を描く必要を感じてきた。……2年次生のゼミ内容を紹介させていただければ「青年の老後観に関する調査研究」と「大学生の友人関係」の2つの研究発表があった。前者は社会調査の手法に優れ、後者はソシオグラムを用いた語学クラスの友人関係の分析であった。後者については私自身、以前インタビューを繰返したテーマであったから、共同研究を申込みたいほど興奮を味わった」（『現代学生浮遊感覚』『IDE・現代の高等教育・No. 281』民主教育協会、1987年4月号）

2回のゼミでの発表後、ワープロ打ちの原稿を出してもらい、それをまとめたのが本報告書である。時間の不足からまだ荒削りな部分も多い。学生諸君が未知の人間と知り合い、自分たちでテーマをみつけ、それを実証する方法を工夫し、文章を書き上げた努力の結晶がここにある。」